

# まいんど マインド Mind

藤田 庄市

ジャーナリスト

シリーズ  
(129)

## 遠寿院荒行指導

### 再行僧の存在意味

遠寿院の荒行は行堂改革の途上にある(別掲)。行堂改革において第一に問題とされたのは初行僧に対する先輩僧の暴力暴言や罰水(罰としての水行)などだった。そこに生じたのは絶対服従と思考停止である。

荒行(寒水白粥 凡骨将死)を通じて、深く内面を見つめ精神の高みを目指すべき理念(理懺事悔 聖胎 自生)は霧消してしまひ、極論すれば、こけおどしの祈禱作法を覚えただけの増上慢が世間を騙るだけである。

客寮(事務局)長を務めてきた人物であり、改革後に初行を成満した2人が再行として入行した。改革世代が指導する時代に入ってきたといえよう。

今回はどうであったろうか。2月10日の成満から間もなく、再行僧からこんな言葉が発せられた。

「楽しく悦びに満ちた、あつという間の100日間でした」。再行の上田本立(35)は語った。檀信徒にそう告げると、「いい修行ができましたね」と喜ばれたという。2015年の初行時は、腸の患いがあり、尊神(鬼子母神)と向き合おうが疎かになり、後悔が残っていた。同じ再行の辺見行敏(34)は、「読経三昧のなか、法華経の一字、一字がどんと目に飛び込んできました。その日を導く。第二には、

初行の直接的な指導を果したずのは再行僧である。それは、水行や読経、祈禱の作法から掃除、食事の準備まで行生活全般にわたり、当初、雑務については知客寮の先輩僧も指導に入った。

今回の再行は、冒頭の2人に加え川添裕資(28)の3人。彼らは初行の指導にあたり話し合い、統一した方針を決めた。従来だと、自分が初行だった時をモデルにして指導内容が食い違ふことがあったためだ。方針は第一に行堂改革の基

にも及ぶことを再行僧の上田は指摘した。

初行の中山大誠(25)は掃除や食事の配慮についての指導は、日常生活に役立つ経験を学ばせてもらったという。また、初行僧仲間「なんでできないんだ」と感情まかせに当たると、自分に返ってくるのがわかり、自分の行動を見つめ直し反省した。その結果、彼は「修行一より一般常識が大切であると独自の気づきを得たのである。その気が



100日間の行を終え荒行堂の瑞門を出る修行僧。先頭は全堂代表の望月龍賢氏(藤田撮影)

【遠寿院荒行】日蓮宗遠寿院荒行堂(千葉県市川市)は、日久上人を流祖とし400年の伝統を有する修行道場である。毎年11月1日から翌年2月10日までの寒百日間、修行僧が籠る。毎日水行7回、法華経読誦三昧、睡眠三時間、食事は粥の2回。口伝を含め各種相伝が伝授される。行とその理想は、「寒水白粥 凡骨将死 理懺事悔 聖胎自生」(事悔聯しげれん)が示している。

現在の集団修行システムは明治時代に形成された。五度の入行を最多とし、行の回数が増えたとされた指導がなされる。伝師(最高責任者)の戸田日辰は(この五行制に旧大日本帝国軍隊の悪弊を指摘する。2019年に戸田は行堂改革に踏み切った。2023年度の入行僧は、四行1人、再行3人、初行5人の計9人。

の目にお経から新しい気づきを与えられました。文字が仏でいらっしゃる(と確信した)「毎回の動行が一期一会と感ずることができ

初行の横山正明(37)は当初、先輩僧の指導と合わせ、声の出し方に注意をさせた。自分では再行僧である。それ以上を求めていた。ことに作法から掃除、食事の準備まで行生活全般にわたり、当初、雑務については知客寮の先輩僧も指導に入った。

初行で一番声が大きくなった。読経では、精神を込めて声を大きく、姿勢を正しく、経本を持つ角度を教える。具体的には、

初行で「自分のなかに祖父がいる」と感じた。

彼は「自分のなかに祖父が

「自分で考えて行じよ」

改革が進む中で、行僧の資質や人間としての器の問題意識が表面化してきたのである。(敬称略)

ふじた・しょういち / 1947年東京生まれ。フォトジャーナリスト。著書に『行とはなにか』(新潮社)、『修行と信仰』(岩波書店)、『現代山岳信仰曼荼羅』(天竺人)、『カルト宗教事件の深層』(スピリチュアル・アベニュー)の論理(春秋社)、写真集『伊勢神宮』(新潮社)ほか多数。